

ニュースレター

「フリートーク:私・たちの〈声〉を交差させあう」(5/16)での 論議から

5月30日(日)、「生・労働・運動ネット」は、4・25「路上会合:沖縄の〈声〉と呼びかけあう私・たちの〈声〉を！」に引き続き、「路上会合:沖縄の〈声〉と呼びかけあうことを日本の構成的解体の始まりに！」と題するデモ・街頭アピールを、約20名の参加者と共に富山市中心街で行いました。

5月16日(日)、5・30「路上会合」に向けて、「アンラーニングプロジェクト2010年前期企画 私・たちと沖縄——〈と〉のざわめきから／へ」の第4回として、「フリートーク:私・たちの〈声〉を交差させあう」を行いました。その中で、沖縄の〈声〉と呼びかけあおうとする日本(ヤマト)の私・たち自身が向かおうとする〈先〉はどこなのか等をめぐって、活発な討論や、意見交換が行われました。以下、当日の論議のアウトラインを紹介します。

□私たちは沖縄の〈声〉が登場する「場」を創りだせるのか

今回の「フリートーク」では、まず最初に、進行から発せられた、「今、起こっていることは何の問題なのか」という「問い」をめぐって、参加者同士での討論・意見交換が行われました。

そうした論議の中で、沖縄の人たちにとって、「基地」という言葉には、「住み慣れた土地の強制収用」や、「米兵犯罪」といった、たくさんのルビや「括弧」がついていて、100人いれば100通りの意味がそこに込められているだろう、という発言がありました。そのように、沖縄の人たちがたくさんのルビ・「括弧」をつけることを抜きには基地について語れない状態にいることと、日本(ヤマト)の私たちがそうしたルビ・「括弧」抜きに基地問題を語ってしまえることとが、おかしな具合に「対」をなしているという状況があります。そういった状況を変えるためにも、日本(ヤマト)の私たちが、「基地」という言葉につけられた「括弧」を丹念に解きほぐすことが求められているのではないか、という発言がありました。

今回、資料として配付した新聞記事の中に、今、沖縄の人たちは、70年12月の「コザ暴動」の時と同じくらい怒っているという発言がありました。それを受けて、ある参加者は、当時、「コザ暴動」のことをマスコミ報道で知った時に、そのように沖縄の人たちがアメリカによる占領体制と身をもって闘っていることに大きな感銘を受けたということでした。当時、ベトナム反戦運動や沖縄の「本土復帰」を問う運動がこの国の各地で大きく高揚していましたが、間違いなく、その時代には、沖縄とヤマトとは互いに「共鳴」しあっていたように思います。しかし、そうした沖縄と共鳴しあおうとする〈声〉は、それから40年後の今、ヤマトでは大きく後退しています。

その一方で、90年代半ばから、沖縄の人々は、自分たちの意思に反する基地の押しつけに対する

憤りや抗議を政治的に表現し続けてきています。その蓄積の上で、現在のような普天間基地「県内移設」反対の〈声〉が大きく高まっていることは、今さら言うまでもありません。しかし、「基地」という言葉にどれほど多くのルビ・「括弧」がついているにせよ、沖縄の人々自身も、基地の強制によって自分たちが生きることの根底にまで及ぶ深刻な暴力を被っている状況に対する反対の〈声〉を、普天間基地の「県内移設」反対という政治のレベルの言葉でしか表現できていません。それは、沖縄にとっても貧しいあり方ではないのかという意見が、ある参加者から出されていました。そのことは、沖縄の運動の限界というよりも、そうした沖縄の〈声〉が、政治の言葉に貧しく「翻訳」されることなく登場できる「場」を豊かに創りだしていない、ヤマトの私たちの側の問題であるはずです。

そのような論議の中で、普天間問題をめぐる記事と、年間自殺者数が連続して3万人を超えたという記事とが新聞の同じ紙面で隣あわせに出ていたのがこの国の現状を象徴しているのではないかと、という発言も出ていました。この十数年間、「構造改革」の名の下で強行されてきた私たちの「生の保障」の破壊によって、実質的なまとまりとしての日本社会はほとんど崩壊していると言ってもいいような状態になっています。そのような意味でも、私たちの「生の保障の破壊」と、ヤマトの沖縄支配の構造の両方を貫いて、日本国家を「串刺し」にする言葉が求められている、という意見が出されていました。

□街頭で「困民の旗」を高く掲げたい

今回の「フリートーク」では、この間の普天間基地問題をめぐる数多くのマスコミ報道や論調が、アメリカの軍事覇権主義に日本が追随していることや、日米安保同盟に対する批判的な視点抜きに、移設先が最終的にどこに落ち着くのかという観点だけで問題を論じていることに対する批判が、何人も参加者から出されていました。

そのような論議の中で、駅の地下道で寝ているホームレスの人たちの傍らを私たちが無関心に通り過ぎてしまうことと、沖縄の〈声〉にヤマトが耳を傾けようとしないこととは根底でつながっている問題だと思うが、その点についてそうした人たちへの支援活動を行っている人はどのように感じているのか、という問いかけが出されていました。それに対して、日頃そのような活動に取り組むことがいやになっているわけではないが、そうした人たちの生き難さを生み出している社会のあり方自体が何も変わらないまま、支援活動を行うのは際限がないことだと感じているという発言が、実際に元ホームレスの人たちへの支援活動を行っている参加者からありました。

「政権交代」後もこの国の貧困をとりまく状況はほとんど変わっていないのに、マスコミは貧困の問題をかってほど取り上げなくなっているし、そもそも、こんな状況になってしまったことをどうするかという論議がほとんどない。今、沖縄では、「ヤマトは、沖縄への基地の押しつけをどうするつもりだ！」という〈声〉が大きく高まっているが、この社会の中で生きがたさを強いられる者たちも、そのように、「自分が生きていけないこんな世の中をどうしてくれるんだ！」という〈声〉を一斉に上げるべき時ではないか。そのように、沖縄の〈声〉と呼びかけあうことだけに限らず、この社会の中でどうしようもなく困り果てている者同士が街頭で呼応しあうことに向けて、いつも掲げることができるような「旗」をもちたいという思いが、その参加者から語られました。

この数年、富山の私・たちが交流を進めている東京の「フリーター全般労組」では、賃金の未払いや、遅刻・欠勤への過大な罰金制度といった劣悪な労働条件を告発した勇氣ある女性の行動をきっかけに、「キャバクラユニオン」を組織化しています。その「キャバクラユニオン」として店の経営者との交渉に赴いた時に、店頭で客引きをしている男性従業員たちに取り囲まれて、店の経営者よりもむしろ、客引きでしがらない稼ぎをしているような男性従業員たちと対決することになってしまったそうです。そのような店で何の保障もなく、様々な脅迫・暴力や「蔑視」を受けながら働く女性たちは、「困民」とい

うよりも、それよりも更に下にいる「窮民」と呼ぶべき存在ではないか、という発言がありました。そのように、生き難さを抱える者が勇気を出して声を上げることを圧殺して、支配者側にくみするのは、しばしば、同じように生き難さを抱えている者たちではないか。結局、「生の困難」を抱える者同士の新たなつながりを生み出そうとする運動が抱える困難はそこにあるように思うという意見が、その話を受けて出されていました。また、富山のある平和運動団体が人権派の弁護士を迎えて憲法をめぐる講演会を企画しても、憲法の理念を本当に実現するためにも沖縄といかに連帯するのかといった話にはならないような、既成の平和・護憲運動の発想の狭さに対しても、疑問が出されていました。

そのような人々や運動間の「分断」状況を変えていくという意味でも、沖縄の問題も、ホームレスやキャバクラの女性従業員といった現在の「窮民」の問題も、同じように取り組むことができるだけの思想的なスタンスや表現が求められているはずです。そのためにも、この2回の「路上会合」で終わりということではなく、この後も何度も路上に出て自分の体を「街頭」化させることで、街頭に相応しい体の動きや言葉を生み出すことができるようにしていきたい、という発言がありました。

□日本国家を「いくつもの『日本』・「いくつもの『民』」へと解体する

以上のような、現在の沖縄をめぐる状況を自分たちとしてどのように考えるのかをめぐる論議の後で、「私たちは〇〇ではなく、××である」と言う時に、そこにどのような言葉を入れるのかという「問い」が、再び、進行から投げかけられました。その「問い」に対して、あえて何か言うとしたら、例えば、「普天間移設劇の『観客』ではなく」ということであり、また、5・30「路上会合」のテーマでもある「日本の構成的解体」を進める「当事者である」ということになるのではないか、という意見がありました。

日米安保をテーマとするあるドキュメンタリー映画の中で、韓国・梅香里(メヒャンリ)で米軍の爆撃訓練場への反対闘争を闘う現地住民と北海道の自衛隊駐屯地内で農場を営む農民との交流が描かれています。そのような世界各地で反基地闘争を闘っている人たち同士のネットワークが、様々な形で存在しています。4月25日の「路上会合」では、「東アジアの人々と共に『民衆の安全保障』の『環』の創造を！」ということが、主要なスローガンの1つになっていました。反基地運動を闘う人々の間では、沖縄戦の惨禍に示されているように、「軍隊は民衆を守らない」ということが1つの共通認識となっているように思います。そのように、軍事力による国家安全保障という発想を根本から否定して、国境を越えて軍隊や基地のない世界を創りだそうとする「民衆の安全保障」の「環」の中に日本国家を解体するということが、「日本の構成的解体」ということの1つの重要な方向性ではないかという発言がありました。

そうした論議の中で、政権が交代したのだから、「我々は前政権とは政治理念を異とするものであり、前政権時代の日米交渉は一度『差し戻し』にしたい」という程度のことはアメリカに申し入れるのが議会政治の「常道」ではないのか、なぜ現政権はそんなことすら言おうとしないのか、という疑問が出されていました。その疑問に対して、それは政治家の気概や思想性の無さという以上に、沖縄の問題に下手に手をつっこめば自分も「火傷」しかねないという、ある種の「怯え」の反映ではないのかという意見が出されていました。単に一つの米軍基地の閉鎖をアメリカと交渉しようとするだけでも、アメリカへの「隷従」から日本の「国益」を導き出してきた戦後の日本の政治のあり方や、沖縄へ米軍基地を集中させることで非武装・戦争放棄という憲法の理念の遵守を「偽装」してきた戦後日本の60年余りの軌跡自体が、問われざるを得ない。そのことを感じているからこそ、現政権は「辺野古移設案」という前政権の路線を踏襲するしかないのではないか、ということでした。そうであれば、なおさら、私たちとしてはあえて「火中の栗を拾う」ことを辞さずに、沖縄の〈声〉に喚起されてきたことを手放すことなく、街頭でそれらの言葉を解き放ちたいという発言が、その意見を受けて出されていました。

そのような論議を受けて、民俗学者の赤坂憲雄が、一見、この日本は1つのまとまりをなしているように見えても、実はそこにはいくつもの「縫合線」があって、それらをほぐしてみると「いくつもの『日本』」が出現すると言っているという話が、ある参加者から紹介されました。この間の沖縄をめぐる問題は、主に「沖縄」対「沖縄に基地を押しつけるヤマト」という構図として語られている。その捉え方は別に間違っていないが、ヤマトが1つのまとまりとして存在すること自体をヤマトの私たちが問わない限り、沖縄の〈声〉と私たちが呼びかけあうことにならないだろう。そのような意味でも、島尾敏雄の提唱する「ヤポネシア」という考え方は有効性を失っていないのではないかという発言が、その話に続けて出されていました。

弧状に連なる自律的な共和空間の連合体として日本を捉えなおそうとする「ヤポネシア論」のような思想の流れが日本本土にないわけではありませんが、沖縄でも、「ヤポネシア論」の発想に喚起された人たちも含めて、「沖縄自立」とは何かを模索してきた思想の系譜が存在しています。その中でもとりわけ、新川明など、「反復帰論者」と呼ばれる人たちは、そのことを今でも持続的に考えようとしています。そうした人たちが何を問いかけているのかということも、このような自由な討論や学びの場での重要なテーマにしていきたい、という提起がありました。

先ほども触れた「フリーター全般労組」が毎年5月に開催している「自由と生存のメーデー」の今年のテーマは、「私たちは棄民です。初めまして」というものです。「いくつもの『日本』」ということに対応させて言えば、この日本には「いくつもの『民』」がいるわけですが、それも、「困民」や「窮民」、「棄民」といったマイナスの「符号」が付いている「民」が多くを占めています。日本列島で生きている人々が「国民」という枠組みを自ら解体して、改めて「困民」・「窮民」・「棄民」として自分自身を捉えなおし、新たな集合性を獲得する。更に、そうしたいくつもの「民」が、日本社会をどのように壊していくのかをお互いに顔をつきあわせて大いに語り合う。そのように、「いくつもの『日本』」や「いくつもの『民』」に向けてこの日本を解体するというのが、「日本の構成的解体」として自分がイメージすることだという発言が、その提起に続けて出されていました。

「生・労働・運動ネット」では、07年春から、参加者同士での自由で活発な討論を通じて、「自己責任論」のような、私たちがいつのまにか身につけさせられている価値観を「学びすてる」(unlearn)ための場として、アンラーニングプロジェクトを営んできました。今回の「フリートーク」を最後として、この3年間続けてきたアンラーニングプロジェクトを終了しましたが、それに代わる新たな討論・学びの場として、私・たちは、「オルタセミナー」を企画しています。「オルタセミナー」は、今のようではない、もう1つの「オルタナティブ」な世界のあり方を手探りする場であると同時に、話し手と聞き手といった分割を超えた「オルタナティブ」な学びの場を目指しています。今年6月の「イントロダクション」を皮切りとして、「オルタセミナー・2010年度前期:『日本』の構成的解体を模索する」が、スタートしています。

小泉流の「構造改革」路線によって日本社会が大きく破壊されてきたことの結果や「しわ寄せ」だけを、私たちは否応なく負わされているという現状があります。そうした「民の切り捨て」の下で成立している日本国家の「構成」を私たち自身の手で壊すことこそが、「民の生きる道」であるはずです。(なお、「構成」を英語で言うと"constitution"という言葉になるが、それは大文字では「憲法」という意味であり、日本の「構成」を問うということは、まさに憲法といった国の根本原理を問うことでもある、という発言が「フリートーク」の中であったことを付記しておきます。)

「オルタセミナー・2010年度前期」では、いくつかの論文やテキストを素材として、「いくつもの『日本』」・「いくつもの『民』」へと日本をいかに解体するのかをめぐって論議を進める予定です。アンラーニングプロジェクトに引き続き、この後の「オルタセミナー」にもぜひ、ご参加下さい。